



## 釈尊のさとり

### 親鸞の生き方

お釈迦さまは、インドの花園で4月に誕生されたという言い伝えから「花まつり」としてお祝いされてきました。その王子が悟りを開いて仏となられたのが「仏教」のはじまりです。

\* \* \*

仏とは、「仏陀」「目覚めたもの」という意味です。そして、「悟り」は、無知ゆえに世界や人生を間違っているとらえ、誤った生き方をして苦悩していたものが、真実のあり方を知り、「正しい人間性を回復する」ことです。本来の仏教の目的とは、亡くなった人が仏になることではなく、自分自身が仏になることを目指すものなのです。

私たち人間が住んでいる世界は此岸、迷いと煩惱の世界です。そして悟り（理想）の世界は彼岸です。その間の河は、大きく広く、深く、時に荒れ狂います。その河を泳いで（悟って）、此岸から彼岸へ到達しようとするのが仏教です。

この河を泳いで渡ったのがお釈迦さまでした。それは妻子も財産も地位も一切を捨て（出家）はじめて得られるものでした。しかし、出家すれば誰もが必ず彼岸に渡れるというものでは

ありません。まず泳ぎきるといふ能力がなければなりません。彼岸に到達できるのは、出家者のうちでもごく少数の人間でしかなかったのです。お釈迦さまが最初に説いた「仏教」は、そうした少数の出家した人のための教えでした。素晴らしい教えであっても、能力も知識もなく生きることの追われ苦悩する大多数の人間は救われない、手の届かないものだったのです。

しかし、釈尊入滅後4、5百年を経てインドには、真の仏教なら、すべての衆生（この世に生存するいっさいの生物）を救済し、仏陀の境地へ導くことを目指さなければならないのではないかという考え方が芽生えてきました。これが「大乘仏教」です。この「小乗」から「大乘」へと歴史的、段階的に発展してきた仏教が、広く中央アジアから中国に、さらに朝鮮半島に、そして日本へと伝わりました。さらにその間には、それぞれの風土と土着文化の影響を受け、さまざまな民族の言語に翻訳され、社会や時代によって形態も変化してきました。しかし、「仏教」が「仏になる」ことを目指すものであることは普遍の目標であり、それを願わなければ「仏教」ではないのです。

\* \* \*

その悟りを開いた永遠の覚者であるお釈迦さまと、法灯と

仏法を守りぬいた弟子たちへの敬意を、大乘仏教では、

… 高く険しい山に登ろうとすると、軽装備の素人では登ることができない。よく訓練されたプロ（修行者）が、重装備をもってようやくきわめることができる。登山道もすぐれた先達が、いろいろな道を整備して下さったおかげで、大勢の人たちもこの道に続くことができる。釈尊はそれを成した方であり専門家を養成して下さった。…

お釈迦さまの悟りがあってこそ、そして伝えてくださった多くの尊者（高僧）なくして、私たちに仏になる教えと道が届くことはなかったのです。

そして、親鸞聖人は、大乘仏教を「絶対他力の仏教」として完璧にされた完成者だと言われています。それは、凡夫が仏になる道、このまま、あるがままに必ず渡し切ると誓って下さった仏（阿弥陀如来）の本願を信じて疑わず、衆生のために用意して下さった「大きな乗りもの＝願い」に乗せていただくしかないという強い信心を貫かれたご自身のご生涯でお示し下さいました。

**生死の苦海ほとりなし**

**ひさしくしずめるわれらをば**

**弥陀の弘誓のふねのみぞ**

**のせてかならずわたしける**

とご和讃に詠われています。

合掌

ご案内

帰敬式(おかみそり)

築地本願寺で勤修されます「宗祖親鸞聖人降誕会法要」において、おかみそりをいただき法名を授かる帰敬式が執り行われます。ご希望される方はお電話にて奏庵までお申し込み下さい。当日の詳細についてはお申し込みいただいた方に直接ご連絡いたします。

記

日時  
2017(平成29年)  
5月21日(日)  
午前11時20分～  
築地本願寺本堂にて

受式冥加金  
成人 15,000円  
未成年 10,000円  
法要懇志5,000円を含む

=====

言葉の散歩道

無理があつて  
無理がない  
無理をして  
無理をしない

快心  
快言  
快働  
快生

ほんとうの慈悲には  
智慧がともなう  
ほんとうの智慧には  
慈悲がともなう

元教育中央研究所長  
山本紹之介

最近頃に細かいものが見えなくなって、「ジャズは譜面が見えないと弾けなくなったのに、歌謡曲は見えなくても弾ける…」と自虐を言いながら懐メロを弾く家内のピアノで歌いながら、昭和の流行歌が「やくざ者」「犯罪者」「なさぬ仲」「忍ぶ仲」がほとんどなのには笑ってしまったが、歌には説教がましさはなく、正当化してもなく、女々しくもない、そこに溢れているのは「情」だった。■忘れていくばかりの中で、意味もわからず口ずさんでいた歌を覚えている。一度もちゃんと歌ったことがなかっただろう『瞼の母』さえ歌えてしまい、今になってその「ヤウ」ではない母子の仲を知って不覚にもグッとくるのは、不本意だが年のせいか血なのだろうか。考えてみれば、ジャズ、ブルース、カントリーに歌われている人間も大方完うなものはない。芸術の中で一番庶民が触れることができるのが音楽であり中でも流行歌で、人種や国が違って、世間では正しくないと言われる心の痛みが魂が揺さぶられ歌となってきたからだろう。■そんな昔の大衆文化は、世の中に「訳あり」の人がいることを教える役割もし、世間から外れざるをえない人がいることへ、子供心にも言ってはならないことがあるという気遣いを育てた。その基準が今よりもっと人間の根源とところにあつたように思う。今の方がずっと多種多様の「訳あり」が多いのに、世間が「こうでなければならぬ」という横並びの善悪や感動の仕方に支配されているように思えてならない。■敗戦後の民主主義は、人には真の平等は与えられていない現実を受け入れ、その上でのいのちの平等であるという尊厳を底力にして日本人を育んだ。その良さは、身の程を知った謙虚さであり、個性であり、面白さであり、自由というものだった。しかし今の大衆文化は窮屈で腹の据わりがなくなっているようだ。根拠なき明るさ、裏腹の妬みや焦り、独りよがりな雰囲気だけの精神性は、かつての「情」とは違うものだ。情はかけすぎても薄くてもいけない。その絶妙の兼ね合いを、人と人とがネットという血の通わないものを挟んでもものをいう時代が失わせていつているのではないだろうか。

Norimaru

奏庵法座  
【花まつり】

日時  
4月26日(水)  
午前11時～  
「真宗宗歌」  
正信偈  
法話

中垣昌美師

大阪善宗寺 住職  
龍谷大学名誉教授  
元アメリカ開教使  
ご文章拝読

「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

前回は2年前、臍臓が悪いとお聞きしてから、もう少しで90歳に届くご本人曰く、「声、元気やる、死ぬ前の元気やと思うねん」と、福祉学会で上京するのに重ねてお出で下さいます。遅かった桜も散って新緑へと向かう季節です。どうぞ先生に負けずに元気出してお参り下さい。

